

話語文は変ってくる。といえるしたがつてこの調査によつて子供の生活場面のひろがりや、文化の過程を知ることが困難である。ぬけた助詞の調査については、幼児の話語文中にみられる助詞の使い方の方の実態を知る一つの参考として行つたもので特にぬけた助詞の量を問題とするのではない。ぬけた助詞量のその結果を取り上げて幼児に完全な言語生活を要求したり、特別にことばの訓練をしてみる必要はなく、これは成熟による自然の発達をまてばよいのではないだろうか。勿論相手に意味が理解されないようなことばや、又発音不明瞭や、早口、乱棒なことば、まわりくどい話したことばなどは周囲の理解ある手によつて正しく指導されなければならないことは

云うまでもない。正しい言語指導は幼児に大人じみたことば使いをさせることではなく、あくまでもおきな児のことばから出発したこともらしく、素直で明るい、はきはきしたことば使いを習得させることでありたい。幼児に正しい言語指導を行うには幼児の生き生きした実際の言語発達を十分理解しての上でなければならぬ。それにはまづ幼児の話し、基礎のことば、幼児語などを十分に理解することが必要である。日頃実際に私達の扱つてゐる園児の個々について語いの量や、言語の習得状態などを心得ておきそれを基礎として科学的な補導をすることによつてこの目的が達せられるのではあるまいか。

## 排尿排便の躑(トイレットトレーニング)の調査

名古屋市立保育短大

珠

川

善

子

一宮市葉栗保育園

高

島

榮

美

子

白

木

喜

美

子

櫻

井

良

子

### 調査の動機

乳幼児期の躑が、パーソナリテイの形成に非常に大きな影響を与えるということは、最近十年あまりの間に色々議論されるようにな

つた。そこで私達は、乳幼児期の躑の中でもことに排尿排便の躑について考えてみた。排尿、排便の躑について、現在の日本ではどのように行われているか、その程度を知る意味において、排尿排便が自立出来るまでの経過に関する問題、及び母親、子供の態度の問題

母親に関する問題と大別して調査したが、まづ調査(一)の排尿、排便の自立出来るまでの経過に関する問題のみ取り上げ発表する。排尿の躰については、身体的に躰をすべき適当な時期があり、おむつなどでも出来るだけ早くいらぬようにしつけることが望まれるが、それを試みる時期、及び周囲の人々がその取扱いをえらんでしなければ、子供に反抗の態度を起させたりする場合もあるので、しつけるべきよい時期を知るためにこの研究に着手した。

## 研究期間

昭和二十七年七月より昭和二十八年二月までの七ヶ月間にわたる。

## 調査方法

面接調査法による。(調査員があらかじめ用意した形式と順序に従つて、母親に質問して答えさせ、これを記録したものである。)一人の母親につき約三十分間を要し、排尿、排便の自立経過に関する調査項目は別表の通りはじめて排尿排便させた時期、独りで排尿をやつてみるようになった時期、独りで排尿排便後の始末が出来るようになった時期、夜もおしめを外してねるようになった時期等三十一項目にわたつてゐる。そして該当空欄に○印を記入したものである。

## 調査対象

まづ調査地域としては、昨年七月愛知県渥美半島田原町を中心に

田原町においては四三名、次に農商半ばを業とする大久保では四四名、農業を主とする浦では三三名、農漁業を主とする白谷では一四名、計一三四名。次に昨年十一月〜十二月に名古屋市内の三保育園、加工業を主なる背景とするH保育園三四名、軽工業地区を主なる背景とするN保育園三六名、同じくH保育園三〇名の計一〇〇名である。そして田原町周辺におけるものを農村、市内の保育園におけるものを都市として大別して調査を進めたが、各調査地区とも生活状態、教育程度は余り高くない地域であると思われる。

### 被調査の子供の年令

満六才未満で、排尿、排便の躰が完了し、心身共に健康に育つて来たと思われるものをえらんだ。

### 被調査者の母親の年令

市内では九九%田原では九八・五%までが二十六才から四五才となつてゐる。

## 調査結果

おしめを外してはじめて排尿、排便させた時期について、男女共に早いものは、生後一カ月から始めているものが各々三例あり、概してシーズンには関係なく、半年までに五〇%、一年で約九〇%がこれを試みたことになる。そして大体素直に排尿、排便が出来るようになるのは、それよりも一〜二カ月遅く、一年までに約七五%が可能となる。

齒のはえはじめた時期は、男女地域による差はなく、八カ月まで

に五〇%、十一カ月までに七五%となつており、それ以後一、二カ月を経て離乳をはじめたのは、十カ月までに五〇%、一年三カ月までに七五%となつており、齒のはえる頃にすべて離乳をはじめることが分る。

かたことをはじめた時期は、一年までには五〇%一年二カ月までには七五%となつている。

歩きはじめた時期は、一年四カ月までに七五%が可能となる。

排尿、排便をしてしまつてから、これを言葉で教えることが出来るようになった時期は、男女地域による差異は殆どみられず、一年二カ月より一年六カ月の年令段階で可能となつてゐる。

排尿、排便を予告出来るようになった時期は、男子一年一〇カ月までに七五%が可能となり、女子は都市一年六、七カ月、農村が一年八カ月までには七五%が可能となり、女子の方がやや早い傾向がある。排尿、排便共に、一年六カ月より二年で予告が可能となる。

離乳を完了した時期は、地域差男女差が多少みられるが、一年一カ月までには七五%が完了することになるが、都市の男子のみ二年五カ月までに七五%となつてゐる。

つきそえば独りで便器にかゝるようになった時期は、二年より三年までで可能となるが、調査の結果都市よりも農村の方が便器の使用数が多かつたけれども農村のおまるは普通におまるでなく肥料桶らしいもので普通の便器を使用しない様子が見受けられた。

よるもおしめを外してゐるようになった時期は、都市の方がや、早い傾向がみられるが、二年から二年半までの年令段階で、男女共にむつきを使用しなくなるのではないかと思われる。

夜の排尿は自分から起きて独りでゆくようになった時期は、四年では五〇%、四年六カ月より、五年六カ月までには九〇%が可能となる。

反抗的になつて扱いに困難を感じた時期は農村、都市共に四年一カ月までには七五%が反抗期をみることになる。

ひとりで衣服の始末が出来るようになった時期は、男子は四年四カ月までに七五%、女子は農村四年、都市は三年九カ月までに七五%が可能となり、女子の方がや、早い傾向がある。

独りで排尿、排便後の始末を紙ですつかり出来るようになった時期は、都市は男女共に四年、農村は男女共に四年五カ月までに七五%が可能となり、四年より四年半の年令段階で可能になると思われる。

母がだきねをした最終時期は、男子の方が遅く、農村三年三カ月都市三年八カ月、女子は農村二年十カ月、都市は三年までに七五%となり、女子の方が早い傾向が見受けられる。

### 考 察

はじめて排尿、排便させた時期についての中間値は六カ月で一年までに約九〇%がこれを試みているが、早く躰をはじめたものも、六カ月以降から一年位の例もすべておしめは一定の期間を経なければとれない。即ち生後六カ月から一年までの間にはじめてを試み、それ以後一年六カ月でおしめが完全にとれたものが全体の四五%をしめてゐる、子供の態度としても生後一年頃にこれを行つた時には約七五%が素直であり早くはじめた例に比し反抗が少い、排

尿、排便をはじめてさせるのは生後一年前後が適當でないかと思われ。

三年頃に反抗が起つて来るが、二年頃までは時期的な成長発達からみて男女差は殆どなく、子供は母との接触によりその影響をうけるのみであるが、三年頃には離乳もすみ、だきねも終つて母との身体的な分離があり、弟が生れるなどの環境条件も加つて子供の自発性が芽ばえるその時期に、うまく環境に順応出来る子とそうでない子が出来るために、時期的に多少のづれがみられるのでないかと思われる。

夜の排尿の問題について、地域的及び男女の差が多少みられるのは、母又は家人の協力、便所の構造などからの影響があるのではないかと思われる。夜の排尿に起して便所にゆきはつきりしない時、叱るものがかなりあるところからみて、子供が夜に対する恐怖と共に反抗心を持つということも、考えられるのではないかと思う。

農村においては、女子が夜の排尿の問題について、自分から起きゆくようになつた時期が男子よりや、おくれているのは、男子の方が夜の服装が簡単なこと、男子が夜のために所かまわずにするのではないかと想像されたが、都市においてはむしろ女子の方が早い傾向がある。母親が家事に従事するものが多いことと共に、女の子どもだからと云うので気を使い早くからしつけるのではないかと思われる。

ひとりて排尿、排便をやつてみるようになった時期は、女子の方がや、早く、衣服の始末が出来るようになった時期も女子の方が早い、女子の服装は排尿、排便は比較的便利であり、男子のスボン

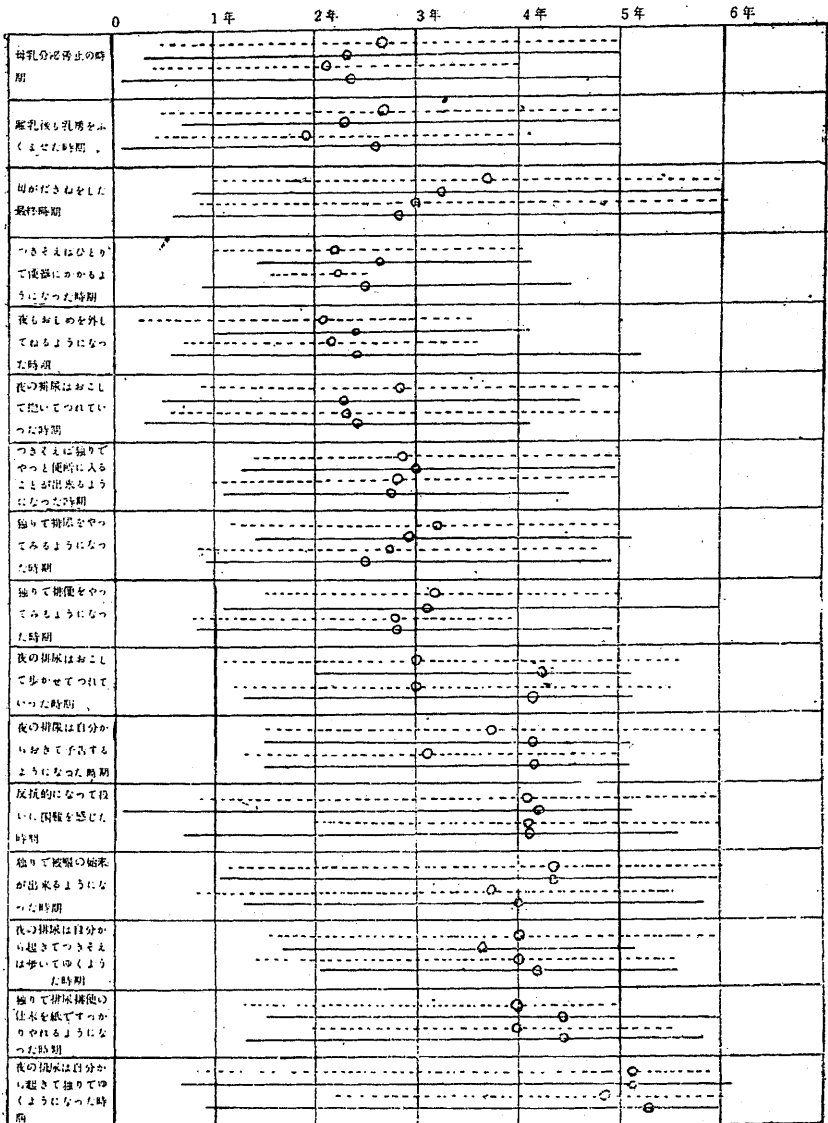
の方が構造の点でや、不便なために、時期的なものにも影響するのではないかと思われる。

はじめて便所に入つてみようとする子供の自発性の芽ばえる二年頃は、その自発性を助長するような可愛らしい、子供には楽しいお便所が作られるのが望ましい、保育園においても年少児のためにもつと設備その他考慮され改善される点があると思う。

以上を総括すると、時期的な発達過程は山下氏の発表の数字と殆ど一致し、農村と都市、母親が早くから排尿、排便の躰をはじめて手をかけるのとかけないのとの関係なく、大体一定の時期が来なければ排尿の予告をしないし、おしめを外してしまうことが出来ないし、ひとりて便所に入ることが出来ないと思えるのではないかと思う。故に子供の躰に当つては、精神的身体的な両面の発達過程を考えあわせよい時期をえらんで躰けることが、その子のパーソナリティを円満にし、母親や周囲の人々の手数の無駄をばくことが出来て非常に大切だと思ふ。

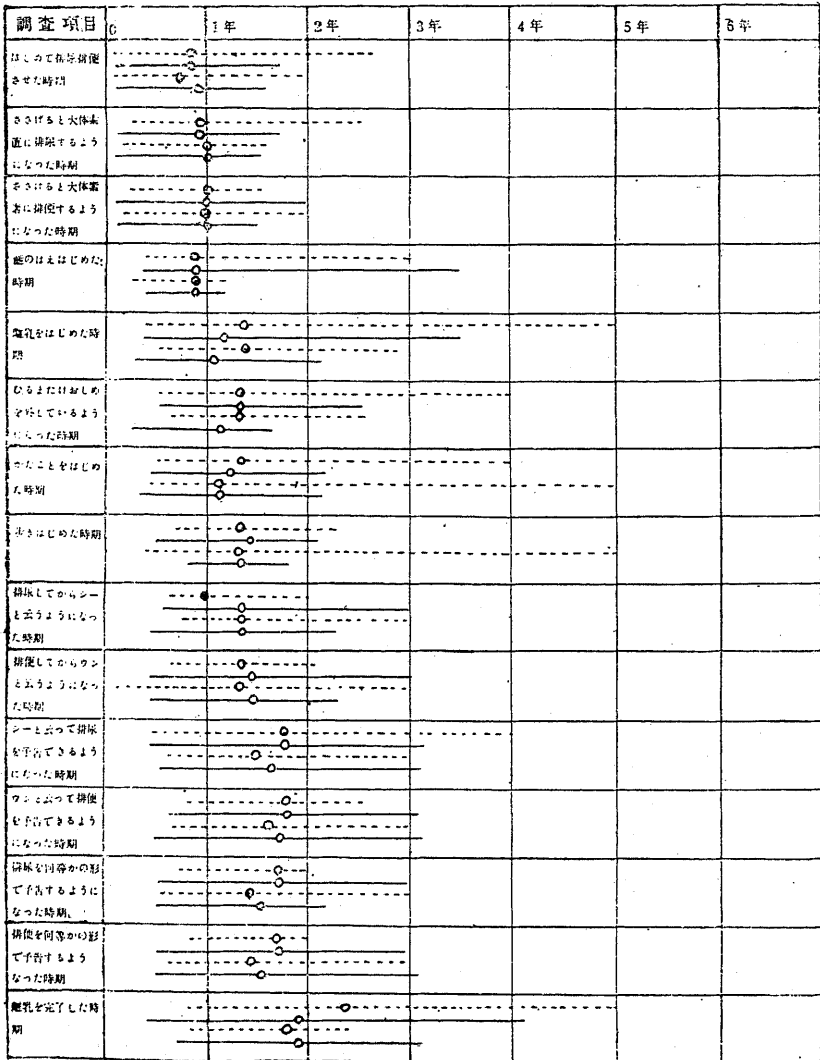
なお本研究は母親の問題（母親の一日の生活状態、及び孝歴、排尿、排便の躰に当つたのは母か又は祖母その他の人であるか）及び母親、子供の態度の問題と共に調査したものであり、母親の側から云えば、都市では余分に世話をやきすぎている傾向がうかがわれ、農村では母親が、経済的、体力的、時間的に子供に接することが比較的少く、その態度が心ならずもほうりばなしにされている傾向がうかがわれる。

母親の態度として、はじめて排尿排便をやらせようとして子供がいやがった時には、無理じいしない、しばらくさせる、叱つてやる



排尿、排便自立期のひろがり〔○印は標準自立期(75%完成)〕

農 村 上 子  
線 部 市 下 女



という許容的、中間的、強制的態度と思われる段階に分けてみたが農村都市共に差なく、許容的態度が五〇%、中間が三〇%となった。また排尿、排便を予告するようになってから失敗した時叱つたものが、都市三〇%、農村二〇%で許容的態度が約五〇%をしめている。すべてを通じて著明な男女差はない。尚又全体を通じて姑のいるような家庭では、排尿、排便の場所が定められており、お七夜などからはじめさせ、比較的早期からきびしくする傾向がうかがわれた。

最後に名古屋市内の都市といつても中流以下の三保育園に限られており、農村と云つても渥美半島の田原町周辺の保育園のみであるのでこの資料が標準になるのではなく、あくまでもこのような傾向があつたということだけを、将来の何かの尺度の一部にでもなればと思ひ綴つてみた。また家庭環境特に母親の問題とも密接な関係をもつて無視出来ぬものであり、今後也更にこの面より調査を続けたいと思う。なお本研究について、御批判並びに今後における御教示御指導をたまわれれば幸いと思う。

(参考文献)

幼児における基本的習慣の研究 山下 俊 郎

乳幼児の心理学、出生より五才まで

アーノルド・ゲゼル著

山下 俊 郎 訳

名古屋附近におけるトイレット、トリーニング

名大、医学部、精神科

◇ 近 刊 ◇

東京都麻布幼稚園長

鈴木虎先生秋

東京学藝大学講師

角尾 稔先生

千葉大学附属幼稚園長

宮内 孝先生

共著

幼稚園教育の実際

序文……倉橋惣三先生

〔内容〕

幼稚園教育の目的・幼児の成長発達・幼稚園

の教育課程・幼稚園に於ける指導・教育内容

の指導法・幼稚園の環境

新しい幼稚園教育の在り方と実際について説かれた教育関係者必読の書!!

発行所

株式会社

フレールベル館

A5判三五〇頁  
クロス装製本  
予価 三五〇円